

令和8年度 第1回「京都市地域コミュニティ活性化・市民参加推進審議会」摘録

日 時	令和8年7月30日（木）午後6時30分～午後8時30分
場 所	京都市役所分庁舎4階 第2会議室
出席委員	16名（志藤会長、並木副会長、前田副会長、荒川委員、今里委員、久保委員、近藤委員、田島委員、玉村委員、千葉委員、津田委員、西村委員、橋本委員、水本委員、吉田委員）
欠席委員	4名（河内委員、竹田委員、中嶋委員、平井委員）
傍 聴 者	1名
事 務 局	文化市民局：並川 地域自治推進室：馬場、石田、早崎、小林、福本、清水、竹中、板東、野田、中澤
議事次第	1 委員の紹介 2 会長、副会長の選出 3 京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン及び本市の関連事業について 4 審議会の今後の進め方について
会議資料	資料1 委員名簿 資料2 座席表 資料3 京都市地域コミュニティ活性化・市民参加推進審議会規則 資料4 京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン（冊子） 資料5 ビジョンに掲げるアプローチと京都市の関連事業の紹介 資料6 審議会の今後の進め方について（案） 参考資料 各区まちづくり運営方針

【議事内容】

1. 委員の紹介

委員ごとに1分程度自己紹介。

2. 会長、副会長の選出

京都市地域コミュニティ活性化・市民参加推進審議会規則2条2項に基づき、委員の互選により志藤委員を会長に選出し、志藤会長の指名により並木委員と前田委員を副会長に選任。

3. 京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン及び本市の関連事業について

事務局から、資料4及び資料5に基づき、ビジョン概要、市の関連事業等を説明。

<主な意見>

津田委員：日中に住民の現役世代がいない地域では、地域の細かい活動も含めて維持していくのが難しいので、その地域に働きにきている現役世代をうまくつなぐこ

とが重要と考える。北区の支店で勤務を通じて、企業が持続可能な形で協力したり、会社のスペースを提供するなどのリソースの提供が起こってきていると感じた。取組を加速していくには、仲介者が必要であり、区役所が役割を担うことや、我々のような信用金庫みたいなところが一部担っていくようなことも考えられる。そういうことが各地域で起こっていくと良いと思う。

吉田委員：目指す姿の「つながる」に関連して、私は不動産の賃貸管理業がメインの仕事だが、地域の人がつながるということで、北区で地域食堂を毎月 1 回開催。周辺に住む方もボランティアで参加を希望され、1 年ほど続けている。周辺の地域は、共働き家庭が多いため、来て遊べるような環境づくりも意識している。行政も含め、「面」で取組ができると、もっとエリアが良くなるのではないかな。

自社だけではなく、他企業や商店街とも連携して進めていきたい。風呂が狭い学生マンションに住む学生に銭湯チケットを提供する等、「そこに住めば世話を焼いてくれる大人がいて楽しい」と思ってもらえるようなまちづくりを、不動産を通じてできないかと考えている。

田島委員：PTA の立場から、子どもがいて働きに出ている方からすると、地元のコミュニティもあれば、勤め先のコミュニティもある。PTA 活動も、日中は働いていて、学校の開いている時間に活動するのが難しいことがある。昼間地域と関われない若い世代が関わるにはどうするか。私たちの世代が住んでいる地域のことを知り、絆を深める方法が課題と思う。

志藤会長：そういう方が京都市民でも大多数だと思う。仕事を通じてということも含め、どうやって地域を知っていくのかの手立てを考えていくのが重要。そこを突破しないと、自治会町内会や色んな地域活動の担い手が育っていかないと考える。

玉村委員：中小企業家同友会の会員は、地方の外商ではなく地域と結びあっていきたいということで、地域企業の概念で関わりを持ちたいと考えており、昼間人口が少ない地域の安心・安全にどう関わるかが重要。例えば、電気屋があえて駄菓子屋を運営し、地域の子どもたちと関係を作ったり、「深草 meet up セミナー」として、行政と連携し、企業訪問で学びの機会を設け、入りにくい工場の中や社長の人柄を知っていただくなど、昼間の担い手として顔の見える関係づくりをかなり意識しているところ。

当会では、各支部が区役所とも連携し色々な取組をしており、右京区の「子どもしごと博」や、上京区との地域連携協定により、行政だけではなく、同志社大学とも連携し、高校生・中学生を巻き込む取組を実施した。地域企業が地域貢献したいと思っても営利目的だと思われることもあり、行政が広い視野で

連携のハブになることで、安心して関わっていただけ、我々と市民の方々が信頼し合えるようになることが非常に大事。

荒川委員：「支え合う」に関連して、社会福祉協議会でも担い手問題は課題で、後継不足で解散を考える団体もいる。一方で、京都市委託の高齢者介護予防活動には年間 3～4 万人の地域のボランティアの方々が活動されており、力強く、地域の火を消したらあかんと思って頑張っている方々が大勢おられる。ただ、高齢化は激しくて、今後を悩んでおられるという状況。

一方で、京都市委託の「子どもの居場所づくり『支援の輪』サポート事業」で、取組団体は 294 団体（令和 7 年度末時点）で右肩上がりに増加。本業は別にある事業者や、特定の日のみ子ども食堂をする飲食店など、多種多様な担い手に広がり、子どもたちが笑顔になるための場を作るという目的のために一生懸命活動をされている。無理に既存の地域活動に巻き込むのではなく、共通の目的で小さなグループが興味関心でつながるアプローチが今の時代らしくよいのではと感じる。また、両分野に関わる立場として、どのようにつなげていったら良いかと考えている。

千葉委員：京都光華大学では、学園祭以外にフェスを企画しており、「光華ワクワク×健やかフェス」と「光華キッズなフェスタ」にどちらも 2,000 人程度が来場し、回数を重ねているところ。障がいのある方を含め、幅広い世代が参加し、地域のお店や学生が出店。出会いと学び合いの機会を作っている。防災支援サークルでは、保育園や福祉施設の定期的な防災訓練で企画に困っているところに、学生が防災に関する紙人形劇や防災すごろくなどをすることで、学生も地域とつながることができるし、防災教育も継続できるという取組をしている。また、右京区の西京極総合運動公園の活性化でも京都市と連携し、来年度から地域プロジェクトを複数走らせる予定。葛野学区でも包括支援センターや自治会との協働のイベントを長年やっている。

水本委員：自身が所属する町内会では、これまで町会長の家でやっていた地蔵盆を昨年度からホテルで開催するようになり、涼しく片付けも楽だと好評だった。お地蔵様を持ち込んで、提灯を飾ったり、皆でお参りするというあるべき形は残しつつ、現代にアップデートすることで、皆が参加しやすくなったことがすごくいいことだと思っている。町会長に負担がかかっていたのを、皆で一緒に負担するようになったので、途絶える心配がなくなった。今後も、守るところは守りつつ、やりやすくするために変えるところは変えるのが、大切だと思う。

参加者は、地域の方が中心だが、以前住んでいた人が子どもを連れて来るこ

ともあるし、町内に料理教室があり、そこのお子さんが参加するなど、ゆるく
というか、厳密に町内限定ではないようになっている。

玉村委員：コミュニティというものを純粋な地縁とか場所で区切るのではなくて、少し
広い概念で捉えておられるのかなという感じで良い事例だと感じた。

前田副会長：地蔵盆はこれまでも時代に合わせて形を変えつつ続いてきた。コロナ禍など
をきっかけに縮小したりして、若い人が参加しやすい形へ工夫していくような
事例が見られる。開催場所や道具の保管場所など、他にもちょっとしたことで
続けられないことがある。先ほど、企業のリソース提供の話があったが、スペ
ースがあるだけで解決できることもある。困りごとの共有の方法が課題。最近
は、学区単位での地蔵盆も増えているが、やったことはなくても地蔵盆自体は
知っていて参加したい人は結構存在している。元小学校や集会所でやると、多
くの子どもが集まった事例を複数知っている。開いていくことが重要であるの
で、そうした取組が広がっていけばと思う。

西村委員：東山区のシニアでいわゆる観光地の清掃活動をしているが、この間区役所が
仲介となり、ホテルの従業員さんで昼間に少し空いている人に 20～30 人応援
に来てもらい一緒に活動したりと、盛り上げているところ。

地蔵盆については、昔の家ばかりになっていて、“老人盆”になっている。地
域で集まってほしいなと思うが、家も再建築不可のところがあって、一回出ら
れると建物が風化していく。市も考えていただいているが、ある程度家を建て
直せるようにしてもらわないと人が住まない。人が住まないと、防犯や災害時
の心配がある。

近藤委員：中京区の日彰学区において、錦市場などの商店街等とマンション居住者の間
で、防災の観点や地域活動の存続といった課題があり、対話の場を設けたところ、
意外にマンション居住者が関心を持って参加してくれた。地域活動に参加
したい人は多いが、チャンスや情報がない。マッチングがうまくいけば新しい
つながりが生まれるので、きっかけ作りが進めばいいんだろうなと考えている。

ビジョンの最後にロジックモデルが書いてあって、何を目標にしてどのよう
に数字で評価していけるんだろうかと感じた。介護予防の観点で、地域のサロ
ンや集いの場に参加することで要介護リスクが半減するというデータが出て
おり、厚生労働省が、後援した自治体にインセンティブが出る仕組みを設ける
など、全国へ広がってきている。防災、福祉など各分野でつながりが大事だ
という話があるので、うまくつなげ、情報を統合する仕組みがうまくできれば良
いと思う。

田島委員：小学校は地域でよく使われ、PTA のお楽しみ会などでも教職員の方々にとてもお世話になっている。今までは、慣例として休みの日や夜間も学校を開けていることがあったが、先生方にも自身の生活があるため、今後、地域のコミュニティの場として、体育館や校庭を使わせていただく時にどのように考えていけばいいのか、課題として感じている。一方で、今後、小学校に代わるものが出てくるのかとも思う。

西村委員：東山区では、小学校が 11 校から 2 校に減り、跡地で利便性の良い場所はホテルになることもあり、人工芝を敷くということでグラウンドを使わせてもらえないこともある。一方で、小学校が 2 つになったから、学区で催し事をすると皆連れてくる。こんなに学区に子どもがいたかなと思うくらいで、盛り上がるということもある。

また、地元の学校が支援学校に変わって、支援学校の生徒たちが区民運動会や福祉まつり等など、色々なことに協力してくれる。あまりに協力してくれるので、自分たちの団体の主体性が削がれないようにということも意識しながら手伝ってもらっている。生徒とも顔見知りになっており、学校のグラウンドや体育館、ふれあいサロンも使わせていただいております、地域住民として支援学校になって良かったと感じている。学校としても、地域との新たなつながりは大切にされている。

橋本委員：私自身、仕事で忙しく地元に関わり合いがなかったが、仕事が忙しくても、ゆるく関われる活動としてホップ栽培を始めたのと、移動式の屋台を使って町の人と自由に関わる取組をしている。ゆるいつながりで出会い、接すると、京都ってまだまだ温かい人や特技のある人がこんなにいるんだと驚く。自分たちだけで頑張ろうとすると、少しずつ広げ、ゆるやかにつながり合える、新しい関わり方、担うだけでなく楽しく参加できる、できる範囲でできることに参加できる形にしていくと、今までと違うことができるのではと実感している。

玉村委員：新しく作った Happy Work Design Lab という株式会社で、左京区の閉店を考えているレストランを借り、放課後の子どもが集まる場所として、取組を行って 1 年になる。費用面が課題で、コンセプトが伝われば活躍してくれる大人や賛同者もあると思うが、なかなか難しい。行政に広報等で支援いただければ上手くいくこともあると思う。お金が回っていないところこそ大事なのだが、維持するのが難しい。ただ、子どもたちが鍵を開ける前に並んでくれている姿を見ると絶対やめられないなと感じる。また、京都は地域活動への熱い思いや

地域愛を持っている人が多いため、その思いを受け止めて、発揮できる場所を提供するということは、みんなにとって幸せに繋がると思っている。

松井委員：学校との連携に関しては、毎年年間スケジュールを学校運営協議会と学校の先生で前もって決めて、参加を依頼している。当日も先生方に鍵を管理してもらうのではなくて、開放事業運営委員会で委員長を決めて、学校との信頼関係の中でだが、地域側がきちんと施錠して帰っている。夏祭りなどでも、学校の先生には部分的に来ていただいて、先に帰ってもらうこともある。自身の活動の中で学校の管理職の方と人間関係を作ってきた。15、6年前からになるが、夏祭りや体育祭、防災訓練などの大きな学区の行事で、小学校4年生以上が「児童スタッフ」として子どもに出来る範囲でブースを手伝っている。先生も指導してくれるし、当日だけではなく、事前に行事の意義やコンセプトをきちんと子どもたちに説明すると、自発的に取り組むようになる。経験を通じて、成長後に他の地域に行ったとしても、地域活動は協力するものだという感覚が育ってくれたらと思っている。

また、私の学区は学校以外に集まる場が少ないため、地域では、「学校を核とした地域づくり」を、学校は「地域に開かれた学校づくり」を運営目標にして双方が協力して進めてきた。

地域活動への関わり方についても、例えば、出席できなくても、Google フォルダで書類を分担作成するなど、仕事の合間でも参加できる形を整えていきたいと思っている。関連して、事務局に質問があり、先ほど紹介のあった「ICT 化推進事業助成金」と「地域 ICT プラットフォーム構築事業」の違いを確認したい。ホームページ作成費用は対象なのか。回覧板の電子化はニーズが高いが、各団体が回すため一元化が難しい。プラットフォームで統合できるのか。

事務局：「ICT 化推進事業助成金」は導入費用への助成で、今年度から一部拡充し、自治会専用アプリの利用料も対象となった。ホームページ作成費用も導入費用として対象。「地域 ICT プラットフォーム構築事業」は、今年度から行政が事業者と契約し、電子回覧板やアンケート等の機能をもつアプリを提供し、地域の負担軽減や幅広い世代の地域活動への参画促進を目指す。利用は地域判断となるが、公募で業者選定後、進めていく予定であるので、その際にはぜひ利用を検討いただければと思う。

久保委員：消防団をしているが、大学で養護教諭を目指す勉強をするため兵庫県まで通学している。京都を出ると、京都は地域とのつながりがすごく濃いなと感じている。右京区では「学童保育あそびのぼ」に関わっており、地域の方が学童施

設で地蔵盆を開いたのを出発点に、季節ごとの祭りを開催し、保護者の方や友達や色々な人を招いている。上京区では、元担任の先生が堀川商店街の中に地域が関われる空間を作り、保育園児から高齢者まで関わり、地域のつながりって本当に大切だと実感している。

消防団で実際に活動している中では、学区によると思うが、私の地域はあまり地域の方と関わりがない。高齢化も進んでいて、学生は自分だけ。暖かい時期に座談会を開くが、屋外だと暑いので、各地域に声かけしても参加者が固定化している状況があり、もっと広がって市としての取組になったらと思いつつ、活動の難しさを感じている。

自分自身は京都市で教員として働きたいと思っており、地域との関わりは大切と呼ばれなくても出たいと思うが、先生方も多忙で、教員の仕事だけでいっぱいになってしまっているのだと思う。

今里委員：大学で若い人と接して感じるのは、小学校時代に地域と深く関わった良い経験を持つ学生は多いが、中学・高校で地域から離れ、大学に入ってくる頃には「関わりたいけど関われない」という気持ちを持っている人も結構いると思う。ハードルを下げて、楽しくできることが重要。清掃活動の話をされていたが、この間学生たちがビーチクリーンですごく盛り上がり、活動をする中で地域の方と話せて、ちょっと知り合いになり、もう少し深く関わろうという気持ちになれたりするというのがある。なるべくハードルを下げて楽しく関わると良いのかなという気持ちがある。

4. 審議会の今後の進め方について

事務局から、資料6に基づき説明。

<主な意見>

千葉委員：地域の好事例のインプットとは具体的に何か。地域の活動を我々が勝手に取り上げて勝手に評価するのは、いささかおこがましいと感じるが、具体的なイメージを確認したい。

事務局：地域の好事例のインプットは、課題などを評価するということではなく、共通する成功要因や流れをまとめるために好事例を見ていくというイメージ。好事例自体を検証して評価していくということではない。検証評価するものとは別で考えている。当然、取り上げる際は相手の了解を得ることが前提。

志藤会長：10年間の計画期間の中で政策として実践していくことを前提に、教訓化や課題を整理することが、一巡目でやるべきことかと思う。できれば、私としては、委員の皆さんが良い実践をされておられるので、実践事例の報告や教訓・課題の共有を進めていくイメージ。それ以外でも良い事例があれば出しながら、プロセスなどを議論し合えればと思う。

千葉委員：「モニタリング」という言葉がでてくると、やはり「出来ている」「出来ていない」という言い方になりがち。活動されている方へのリスペクトを絶対に忘れてはいけない。なんでもかんでもPDCAサイクルで評価するのは弊害もあり、そもそもPDCAは工場の生産効率の考え方で、この分野には馴染まないのではないかと感じている。

志藤会長：リスペクトを欠いてはいけないとの御指摘については、その通りである。近藤先生や並木先生の専門にも関わるため、御助言をいただきながら進めたい。

並木副会長：個人的なイメージとしては、インプットの部分は、評価するというよりは良い事例を褒め称えて学ぶということが大切だと考えている。好事例の他の地域での再現に向けたナレッジ化や、良さを他に伝えるための言語化・数値化ができるとういのはと考えている。

志藤会長：進め方や部会の構成に異議がなければ、この案で進めたい。部会長は会長が指名する規則であり、事務局と調整の上で部会長の候補になる方に打診するため、打診を受けた方は引き受けていただきますようお願いしたい。

並木副会長：今日委員の皆様からお話を聞かせていただいて、皆さんの活動をとっても興味深く、改めてこのメンバーが揃ったことが素晴らしいと感じた。どの事例でも、根底には少子化や単身世帯増などの社会情勢の変化があり、その上で、自治会等や職場の中などの取組で、「コミュニティの編み直し」のようなことを様々な角度から試みていると感じた。西村委員の「若い人が入るのは良いが任せすぎると自分たちのやれることがなくなる」という問題意識は重要であるし、松井委員の「コンセプトはきちんと伝える」形で、守りつつも開いていくやり方が大切だと考える。新しいことをする中で、どうやって地域の大切なものを守りながら、新しい風も入れていったのかというようなことを色々な事例も見えていくと、ゆるやかにシフトチェンジするということができるのではないかな。次回以降の部会の議論を楽しみにしている。